長崎大学教育学部紀要－教育科学－　No.56, 71～79 (1999)

進路指導に関する研究 I

― 教育学部新入生の進路指導に関する調査 ―

朝 長 昌 三

A Study of Career Guidance I

― An Investigation on Career Guidance for the Freshmen of Faculty of Education ―

Shozo TOMONAGA

今日，進路指導は生き方の指導であり，人生設計の指導であるとされている。このような考え方を基礎にして学校では，計画的・組織的・体系的に進路指導が実施されている。これらのことは，高等学校学習指導要領（1989）において，進路指導の充実が提言されていることからもうかがえられる。すなわち，この平成元年に改訂された学習指導要領では，高等学校における進路指導に関して，「生徒が自らの在り方を考え，主体的に進路を選択することができるよう，学校の教育活動全体を通じ，計画的，組織的な進路指導を行うこと」と提言されている。この提言に対して，平成元年12月に発行された高等学校学習指導要領解説の総則編では，「進路指導は，一人一人の生徒が自己を理解し，生徒自ら将来の進むべき道を選択し，自ら決定できる能力を育てるとともに，自分の生きがいと深くかかわる自覚を深めさせる指導である。そのためには，個々の生徒のもつ特性等を的確に把握し，その個性の伸張を図るとともに，生徒が主体的に自己の特性についての理解を深め，将来の学校や職業等に関する情報を収集，活用し，進路に関する相談等を通じて，進路の選択決定をすることができるよう指導，援助していくことが必要である」と，進路指導に関する解説が示され，進路指導の充実が強調されている。さらに，平成４年および平成５年に文部省から発行された「個性を生かす進路指導をめざして　― 生き方の探求と自己実現への道程」と「個性を生かす進路指導をめざして ― 生徒ひとりひとりの夢と希望を育むために」においても，高等学校教育における進路指導に関して，「生徒一人一人の個性を重視し，豊かな人間性を培う，これからの高等学校教育において，進路指導は，生徒が自己の興味・関心等に応じた教科・科目の学習を選択するとともに，それらの学習を通じて自己の能力・適性を発見し，伸張するための教育活動として，また，生徒が自己の能力・適性，興味・関心を生かした将来の生き方や進路の選択決定に欠くことができない教育活動として，一層重視されなければならない」ということが強調されている。

以上のように，高等学校における進路指導は，生徒一人一人の夢と希望を育み，生涯にわたって自己実現を図っていくことのできる能力・態度を育成するような進路指導が図られなければならないとされている。

そのような進路指導に関する考え方にそって，高等学校の生徒の進路決定に活用されて

いる「進路のしおり」においても，たとえば，「自己の存在認識と進路選択」，「自分探しへの旅立ち」，「自己の存在認識と進路選択」といった主題のもとで，進路指導が行われている。そこでは，「自分の進路は自分自身の問題であるから，進路について考える場合には，しっかりとした職業観・人生観にたって，自分は何になりたいか，何に向いているか，何ができるかなどをはっきりつかんでおかなければならない。そのためには自分をあらゆる角度から理解することが重要である。」といったような，生徒の夢と希望を尊重し，生徒の生涯にわたって自己実現を図っていくことを重要視した進路指導の考え方が強調されている。

このように高等学校の進路指導では，生徒一人一人の夢と希望を育み，自己実現を図っていくことのできる能力・態度を育成するように，指導の在り方についての充実が求められている。

本長崎大学においても，長崎大学学生の生活の実態を把握し，今後の修学指導並びに福利厚生施設等の改善に資する基礎資料を得ることを目的として調査が実施され，「豊かな学生生活を目指して」（1997）として報告された。その中で特に，進路指導に関係するものと考えられる事項について抜粋すると以下の通りであった。本学各学部への志望動機の中で，「高校の進路指導による」動機で入学した学生が全学平均では13.3%で，その中でも教育学部の学生は多い方とされている。また，在籍学部・学科等の満足度に関しては，「変わりたいとは思わない」が全学平均では67%，それに対して，「大学を変わりたい」が17.3%，「学部を変わりたい」が11%，「学科を変わりたい」が4.3%であった。教育学部では，「大学を変わりたい」学生が25.8%，「学部を変わりたい」学生が25.4%であった，と報告されている。

高等学校における進路指導の問題点として以下のようなことがあげられている。①学校としての進路指導の目標やこれを実現するための指導計画が立てられていない。立案されていたとしても，本来の進路指導の指導計画とはなっていない。②進路指導は，進学希望者に対しては合格可能な大学等を選定する指導となっている。③学校が行う進路指導について，指導の経過や結果から生じる諸問題について省みられることがない。また，進路指導に対する評価があったとしても，それは，どの大学に，何名合格したかといった評価の在り方となっている。

以上のような問題点に対して，これからの高等学校の進路指導は，生徒が自己の興味・関心等に応じた教科・科目の学習を選択するとともに，それらの学習を通じて自己の能力・適性を発見し，伸張するための教育活動として，また，生徒が自己の能力・適性，興味・関心を生かした将来の生き方や進路の選択決定に欠くことのできない教育活動として，一層重視されなければならないとしている。

そこで，本研究は教育学部の新入生に対して，その志望動機，それの決め手，満足度，反省点等についての調査を行い，高校生時代の進学に対する態度，および高等学校の進路指導の在り方を知ることを調査目的とした。

方　法

1．調査対象　平成９年度入学の教育学部196名

2．質問項目

(1)　現在の学部に決めたのは，次のうち，特に誰のアドバイスによりますか。

①　進路指導の先生
②　担任の先生
③　親
④　兄弟
⑤　自分自身
⑥　友達
⑦　その他

(2)　(1)の質問で，決め手になったのは次のどれですか。

①　成績
②　興味
③　その他

(3)　現在の学部に満足していますか。

①　十分満足している
②　まあまあ満足している
③　不満足である

(4)　(3)で不満足と答えた人に対して，

不満足ではあるが，①　このまま続けてみる
②　進路変更を考えている

(5)　今，仮に，あなたが大学受験を控えた高校３年生だとした場合，大学受験についてどのようなアドバイスがあったら，もっとよかったのに，と思いますか。

3．調査手続き

被験者に対して，学部名，課程名，専攻名，学籍番号，氏名，出身校名およびその所在県名，公立と私立の区別等について記させた。
質問項目(1)については，特に誰のアドバイスによるのかを強調し，１つだけを記させた。

結　果

被験者196人の結果は次の通りであった。

(1)　進路指導の先生によるアドバイス

表のように，進路指導の先生のアドバイスによって教育学部に入学した学生は３人であった。そのうち成績を決め手として入学し，また現在の学生生活に満足している学生は１人，それに対して学部に興味をもって入学したのは２人であった。そのうちの１人は学生生活に満足しているが，他の１人は不満はもっているものの，教育学部

生として今後も学生生活を続けるとしている。

表1　進路指導の先生によるアドバイス

	成績			興味		
	満足	不満足		満足	不満足	
		継続	変更		継続	変更
長崎県内	1			1	1	
長崎県外						
小計	1			1	1	
総計	1			2		

(2)　担任の先生によるアドバイス

表のように，担任の先生のアドバイスによって本学部に入学した学生は28人であった。そのうち成績を決め手として本学部に入学し，学生生活に満足している学生は１２人であったが，不満足としている学生は６人であった。不満足とした学生のうち５人はこのまま本学部生を続けるとしているが，１人は変更を考えているとしている。教育学部に興味をもって入学したのは６人で，この６人は学生生活に満足している。

表2　担任の先生によるアドバイス

	成績			興味		
	満足	不満足		満足	不満足	
		継続	変更		継続	変更
長崎県内	9	5		6		
長崎県外	3		1	4		
小計	12	5	1	10		
総計	18			10		

(3)　親によるアドバイス

表のように，親のアドバイスによって本学部に入学した学生は21人であった。そのうち成績を決め手として入学し，学生生活に満足している学生は10人，不満足としている学生は３人であった。不満足とした学生のうち２人は今後も本学部生を続けるとしているが，１人は変更するとしている。教育学部に興味をもって入学したのは９人で，そのうち７人は学生生活に満足しているが，２人は不満足で変更を考えているとしている。

表3　親によるアドバイス

	成績			興味		
	満足	不満足		満足	不満足	
		継続	変更		継続	変更
長崎県内	9	2	1	5	2	
長崎県外	1			2		
小計	10	2	1	7	2	
総計	13			9		

(4)　兄弟によるアドバイス

兄弟のアドバイスによって入学した学生はいなかった。

(5)　自分自身による決定

表のように，自分自身が決定を下し本学部に入学した学生は140人であった。そのうち成績を決め手として本学部に入学し，学生生活に満足している学生は43人で，不満足とした学生は７人であった。不満足な学生のうち５人は今後も本学部生を続けるとしているが，２人は変更するとしている。学部に興味をもって入学したのは89人で，そのうち84人は学生生活に満足しているが，５人は変更するとしている。また１人の学生が経済的理由を決め手として入学し，学生生活に満足しているとした。

表4　自分自身による決定

	成績			興味			その他		
	満足	不満足		満足	不満足		満足	不満足	
		継続	変更		継続	変更		継続	変更
長崎県内	28	5	1	47	4		1		
長崎県外	15		1	37	1				
小計	43	5	2	84	5		1		
総計	50			89			1		

(6)　友達によるアドバイス

友達のアドバイスによって成績を決め手として本学部に入学した学生は１人で，学生生活には満足している。

表5　友達によるアドバイス

	成績		
	満足	不満足	
		継続	変更
長崎県内	1		
長崎県外			
小計	1		
総計	1		

(7)　その他

その他の理由で，しかも興味をもって本学部に入学した学生は２人で，彼らは満足した学生生活を送っているとしている。

表6　その他

	成績			興味		
	満足	不満足		満足	不満足	
		継続	変更		継続	変更
長崎県内				1		
長崎県外				1		
小計				2		
総計				2		

次に，「自分が大学受験を控えた高校３年生であると仮定した場合，進路についてどのようなアドバイスが欲しいですか」という質問に対して，進路指導に関する要望と考えられたものは73件であった。その中で，① どちらかといえば高等学校への要望と考えられたものは50件，② どちらかといえば大学への要望と考えられたものは８件，③ どちらかといえば自分自身の反省と考えられたものは15件であった。そこで，進路指導の先生，担任の先生，親，自分自身，友達およびその他のアドバイスによって入学した学生が，以上の３点に大別した要望のうち，どの要望に属するかを検討し，以下のような結果を得た。

(1)　進路指導の先生のアドバイスによって入学した学生の要望

どちらかといえば高等学校の進路指導の在り方に対する要望であった。すなわち，成績を基準にした進路指導に対する不満が見受けられた。

(2)　担任の先生のアドバイスによって入学した学生の要望

どちらかといえば高校に対する要望とみられるものとして，成績を基準にした進路指導に対する不満が多かった。また自分自身の反省とみられるものとして，自分の興味・関心を満足させてくれる大学への進学を図るべきだったとする意見もあった。

(3) 親のアドバイスによって入学した学生の要望

親のアドバイスによって志望を決めたためか，どちらかといえば自分自身への反省点と思われる意見がみられた。

(4) 自分自身による決定によって入学した学生の要望

最終的に，自分自身で教育学部への進学を決定したものの，高校の進路指導に対する要望が特に多かったことから，決定に至るまでの高校の進路指導が成績を基準にした指導であり，大学の内容や受験生の興味や関心，適性等をあまり考慮したとは思えない指導が行われているように思われた。

以上のように，教育学部に入学し，現在，学生生活に満足している学生も，不満足な学生生活を送っている学生も，高校時代の進路指導に対しては，かなり厳しい批判の目を向けていることがわかった。

考　察

本研究の目的は，教育学部の新入生が本学部を志望した動機，その決め手，入学したことへの満足度および反省点について，特に高等学校における進路指導の面から検討することであった。

教育学部を志望する際，最終的に自分以外の人のアドバイスによって本学部を志望したのは56人，それに対して自分自身で志望を決定したのは140人であった。その際，成績を決め手にしたのは83人，自分の教育学部への興味を決め手としたのは112人であった。

自分以外の人のアドバイスによって入学した56人のうち，進路指導の先生の　アドバイスによるが３人，担任の先生のアドバイスによるが28人，親のアドバイスによるが22人，友達のアドバイスによるが１人，その他が２人であった。またアドバイスを受け入れた際に成績を決め手にしたのは，進路指導の先生の場合は１人，担任の先生の場合は18人，親の場合は13人，友達の場合は１人であった。それに対して自分自身の場合は50人であった。教育学部に興味をもったことを決め手にしたのは，進路指導の場合は２人，担任の場合は10人，親の場合は９人，その他が２人であった。それに対して自分自身の場合は89人であった。その他の決め手によるものが１人であった。

以上のような動機で本学部へ入学し，数ヶ月の学生生活を満足して過ごしている学生は172人，不満足な思いでいる学生は24人であった。また不満足ではあるが，このまま学生生活を継続していくと考えているは20人，それに対して進路変更を考えているは４人であった。進路指導の先生および担任の先生のアドバイスによって志望を決めた学生は31人であったにもかかわらず，進路指導に関する要望は73件で，特に，どちらかといえば高等学校に対する要望と考えられるものは50件，どちらかといえば大学に対する要望と考えられるものは８件，またどちらかといえば自分自身への反省点と考えられるものは15件であった。

高等学校に対する要望については，① 進路指導の在り方についての意見，② 大学の内容についての意見，の２つに大別された。進路指導については，「成績だけではなく，学部でどのようなことを学び，将来，どのような職業に就けるのかといったアドバイスをして欲しかった」といった，高等学校の進路指導の在り方を問題にした意見が多かった。また，大学の内容についての意見としては，「大学とは，どういうところなのか，どのような授業科目があるのか」といった大学生活についての情報をもっと詳しく知りたいといった意

見が多かった。

大学に対する要望の中に，学部についての情報，たとえば，「自分はある教科を学びたくて入学したが，担当教官が数年後に退官し，その後の教官補充があるかどうかわからない。そのような状況にあるという情報を教えて欲しかった」といった要望もあった。この学生は退学を考えているだけに，このような学部の事情も，受験生にとっては大きな問題点であると考えられた。

自分自身への反省点として，自分の進路については自分で考え，行きたい大学を選ぶべきであるといった，成績よりも興味を満足させるような大学を選ぶべきだと主張した意見が多かった。

高等学校における進路指導上の問題として，「学校としての進路指導の目標やこれを実現するための指導計画が立てられていない」，「１年次からの計画的，継続的な進路指導が行われておらず，進路指導は，進路指導部あるいは第３学年の担任の教師が，３年生に対して行う進路先の選定の指導，たとえば，進学希望者に対しては合格可能な大学等の指導となっている」，「進路指導に対する評価があったとしても，それは，どの大学に，何名合格したか，といった評価の在り方となっている」があげられている。

以上のような指導が行われた結果，高校生の進路に関する意識および進路選択の状況は，以下のような問題を抱えることになるとされている。すなわち，① 自己の興味・関心の方向や能力・適性について理解しておらず，また，職業生活，社会生活などの幅広い理解に基づく将来の生き方の多様性，選択可能性について理解していないために，就きたい職業や活躍したい分野など，高校生にふさわしい将来の夢や希望，目的をもっていない。② 将来の夢や希望がないために，また，上級学校について，各学校，学部・学科等の教育内容や教育の特色について理解していないために，何のために，何を上級学校で学ぶのかといった，進学の意義や目的を理解しておらず，進学したい学校，学部・学科がわからない。③ 教師が勧める合格可能な上級学校を受験し，進学するが，大学等の学業や学校生活に打ち込むことができるものを見いだせないままに，無気力な学業不振に陥ったりして，原級留置や中途退学を余儀なくされたり，そこまで至らないまでも，学校外の生活に楽しみを見いだすなど，学校生活を無為に過ごしたりする者がいる，といった問題があるとされている。

本研究で得た結果，特に，高等学校の進路指導に対する要望は，以上にあげられた問題点とあまりにも合致しており，これらの高等学校における進路指導の在り方は，受験生にとってあまりにも大きい問題となっていると考えられる。

以上のような問題点を抱えた高等学校における進路指導は，今後，生徒一人一人の個性を重視し，豊かな人間性を培う，これからの高等学校教育において，進路指導は，生徒が自己の興味・関心等に応じた教科・科目等の学習を選択するとともに，それらの学習を通じて自己の能力適性を発見し，伸張するための教育活動として，また，生徒が自己の能力・適性，興味・関心を生かした将来の生き方や進路の選択決定に欠くことができない教育活動として，一層重視されなければならない，とされている。

そのような問題を抱えた高等学校の進路指導に対して，長崎県の某高等学校で行われた1998年度のＰＴＡ総会において，進路指導に関する報告がなされた。それによると，「本校では，これまで進学指導は行っていたが，進路指導については取り組みが十分ではなかっ

た。多くの高等学校が似たような状況であったと思うが，学力をつけ，よりレベルの高い大学に合格することを目的とした指導を進路指導と考えていた点があるのは否めない」と，これまでの進路指導の在り方を反省し，さらに，「新課程の生徒が入学してくると，それまでの指導では，ついてこれない生徒が目立つようになった。各教科の学力をつけるにしても，その前にしっかりとした目的意識をもたせることが必要になった。まず，自分自身を深く見つめ，社会についてまた未来について考えることで，自分はどう生きるのかということを明らかにしていく。それを，ホームルーム活動をはじめとして学校のあらゆる教育活動の場で行っていき，人間として生きていく力をつけていく」というように，これまでとは違った，学習指導要領で強調されている，生涯にわたって自己実現を図っていくことのできる能力・態度を育成するような進路指導を行う方針が報告された。
このように，高等学校によっては，進路指導の見直しが行われようとしているが，これが今後その高等学校でどのように展開していくか，また一高等学校の試みが他の高等学校にどのように影響を及ぼしていくのかを検討していく必要があると考えられた。

要　約

本研究の目的は，長崎大学教育学部の新入生が教育学部を志望した動機，その決め手，入学したことへの満足度および反省点を，特に高等学校における進路指導の面から検討することであった。

調査対象者数は196人で，そのうち，自分以外の人のアドバイスによって志望を決定したのは56人，自分自身で決定したのは140人であった。また，成績を決め手にして志望を決定したのは83人，教育学部への興味を決め手にしたのは112人であった。入学後数ヶ月の学生生活を満足して過ごしているのは172人，不満足ではあるがこのまま学生生活を継続すると考えているのは20人，進路変更を考えているのは４人であった。
進路指導に関する要望と考えられるものは73件あり，そのうち，どちらかといえば高等学校に対する要望と考えられるものは50件，どちらかといえば大学に対する要望と考えられるものは８件，どちらかといえば自分自身への反省点と考えられるものは15件であった。
進路指導に関する要望の中で，高等学校の進路指導に対する不満が目立った。すなわち，学習指導要領で強調されている，自己の能力・適性，興味・関心を生かした将来の生き方を含めた進路指導，が生かされていないことからきている，と思われる進路指導に対する不満が目立った。

参考文献

小竹正美・山口政志・吉田辰雄　1996　進路指導の理論と実践　日本文化科学社
文部省　1994　個性を生かす進路指導をめざして― 生き方の探求と自己実現への道程 ―
海文堂出版株式会社
文部省　1995　個性を生かす進路指導をめざして― 生徒ひとりひとりの夢と希望を育むために ―
日本進路指導協会
文部省　1997　高等学校学習指導要領解説―総則編―東山書房
長崎大学　1997　豊かな学生生活を目指して― 第６回学生生活調査報告書 ―　八光印刷工業株式会社